



安善寺奥座敷に納められている『観音菩薩』

蔵王山安善寺

◆編集・発行人◆
近藤龍弘

〒940-0052
長岡市神田町1丁目4番地10
TEL.(0258) 32-2811

◆スタッフ◆

小林国二 小林善秋 高橋潔
加瀬由紀子 近藤マリ子 近藤善信
後援・株式会社アサヒ
印刷・(株)北越時報社

ご家族の皆さままでご覧ください

『今、現在を生ききる』

安藤編集委員長を偲んで

翠巖 龍弘

写真の観音菩薩は、安善寺前住の兄弟弟子で、昭和五十年にホノルルの曹洞宗ハワイ別院で遷化された妙喜寺十世南山龍海大和尚の『守本尊』でした。老師は、昭和十五年にハワイに渡られ、生涯において日本人移住者の方々をはじめ、多くの人々の心の拠り所として仏の教えを説か

れ、また、茶道・華道などを通して日本文化も広められました。老師の遺言により、観音像は安善寺に納められ、奥座敷に祭られております。お厨子を開きますと、老師の慈愛に満ちたお言葉が聞こえてくるようになります。

この季刊誌が発刊されて今回で十八号を数えました。が、季刊誌の生みの親である安藤一夫様が、この十八号を待たずに他界されました。思い起こせば平成十年一月に電光石火の如く話がまとまり、氏は編集委員長として、また、一切の負担をご自身が担われご尽力くださいました。

ご自分の此の世の別れが近づいておられる事を感じになられたのか「季刊誌の事は今後も一切心配ないようにしてあります」というメッセージを残されておられました。氏からいただいた手紙の中に「人間は一生のうち逢うべき人には必ず逢える。しかも、一瞬早すぎず、一瞬遅す

ぎないときに」、「人生は今という時間の集積。充実した人生はその長さでなく、時間の密度の濃さにかかっているのではないかと思えます。幸せを先送りせず、今、このときにしかないさやかな幸せを大事に、楽しんでながら生きて参ります。」と言う文面がありました。

『阿含経』の中で、お釈迦様は「時は移ろいゆく、怠らずにつとめよ」と説かれております。過去に捉われず、実態のない未来の夢ばかり追うのではなく、現在を生ききる事こそが大切だと言う教えではないでしょうか。また、「一期一会」と言うことばもありますが、氏はまさにこれらの生き方をされたのではないのでしょうか。

常々、安藤氏は「この季刊誌をお寺の新聞としては日本一にしましょう」と、笑顔で言われておりました。編集委員一同、皆様方のご協力をいただきながら、より良い季刊誌になるよう精進していきたく思っております。

合掌

笑顔は最高の化粧なり

『季刊蔵王山安善寺』生みの親であり、育ててこられた故安藤一夫編集長を偲んで



高橋 潔

笑わずに天国から見守ってください

それは平成十年の冬、安善寺の初月忌の時だったと思います。本堂で読経を済ませた後、世話人の皆さんと懇談の中で、安善寺の会報みたいなものがあったもいんじゃないですか、そんな話になりました。私も世話人ということですが、お寺に頼まれば

ーとも言えず顔を出すだけの世話人でしたから、会報の発行とのお話も「宜しいんじゃないですか」。何とも他人事の相槌をしておりました。それがその日であったか、その後のお話であったか記憶は曖昧になりましたが、高橋さんあなたも編集会議に出て来て下さい

というお話で、「えっ」これはとんでもない事に？案ずる通りとんでもない事になってしまいました。

初めての会合で、本当に会報なんか出来るのかなと思っておりますと、安藤さんという方が記事の内容から、紙面の割り振りまで、ここはこうゆう記事で、ここはこうゆうレイアウトでと指示されてゆきます。

誰が決めたわけでもなかったと思いますが、編集長の決定です。どうにか拘らないようにとしか考えていない私には有無もなく、だからといって強引という訳でもなく、いつのまにか編集意見を弁ずる委員に引きずり込まれていたという印象です。

安藤編集長にお願いしませんでした。それをお願いしませんでした。いや、そうではないんです。いや、そうではないんです。いや、そうではないんです。いや、そうではないんです。

この人がこれだけ一生懸命取り組んでおられるのだから、私なりに出来ることは何とかしなければ。そんな思いにさせる方でした。

安藤さんの会社のHPを覗くと、親切の人がいる会社でありたいとの思いが伝わってきます。打算とは無縁で、今日一日そして目の前の人ー安善寺ではお檀家の皆さんへの親切がそうさせていたのではと思います。

大切な方を失ってしまいました。いつも編集会議の席に珍しいお酒を提供していただきました。「銀河鉄道」というお酒。編集委員には忘れられないお酒になってしまいました。

思い出は尽きません。安藤編集長に代わる人は居りませんが残った編集委員の所業を笑わずに見守ってください。きつと皆安藤編集長の想いを受け継いでいかなきゃと想っているのですから。

安藤編集長ありがとうございました

小林 善秋

平成十四年六月十四日、蔵王山安善寺の季刊誌第十八号発刊にあたり、編集会議が開かれたが、いつもと違った雰囲気、いまひとつ乗れない気持ちでした。それと

の持参されるお酒（これがまた、なかなか手に入らないようなお酒ばかりで、いつも楽しみでした）とで、楽しい時間を一緒に過ごさせていただきました。

言うのも、安藤編集長が亡くなられて何日も経たないうちの編集会議だったからです。私が安藤さんに初めてお会いしたのは、平成十年一月、世話人の皆様が集合した時だったと思います。その後、お酒の入った席で、安善寺の新聞を作ったかどうかという話が出て（安藤さんの発案だったように記憶しています）あつというまに第一回の発刊となり、編集スタッフも、何か年の若い順に決められたのか？ 私もその一員となり、それ以来おつきあいをさせていただきました。

また、安藤さんは、多数の社員を抱える社長として、多忙な毎日を送っておられたことと思いますが、そんな中、この季刊誌の発刊に心底力を注いでこられたように思い、ただ々頭が下がる思いでいっぱいです。

安藤さんの最後の記事が季刊誌の第十七号に記載されており、この記事を書く前に、もう一度読ませていただきました。我々人間というものは、その時期が近づくとなんとなく仏に近づいていくものなのでしょうか？

最後に、いつも温厚で我々スタッフに優しく、蔵王山安善寺を愛し、誇りに思っ

てこられた安藤さん、これからも天国よりこの季刊誌を見守っていてください。ご冥福をお祈り申し上げます。

福をお祈り申し上げます。

パロロの想い出

加瀬由紀子

安藤一夫編集長と初めてお会いしたのは昨年の夏の編集会議であった。「おうわさはかねがね」「いえ、こちらこそ」などというぎこちないあいさつで始まったのを憶えている。会議後、彼は「あいさつがわりに。私は病み上がりであり飲みません。味はどうでしょう」とテーブルに差し出したのは、イタリヤ・ピエモンテ州の格付けワイン。抜栓してグラスに注ぐと、ネッピオーロ種特有の力強い芳醇な香りが立ち上ってきた。編集長は少量だけ、と固辞しながらもグラスの濃いルビー色の液体を楽しんでいるようだった。

私はふとイタリヤを旅した日を思い出した……ミラノのスピーガ通りの薄日射すトラットリア。隣のテーブルでパロロをゆつくり飲んでいた初老の夫妻から「いかがですか、おいしいですよ」とワインをご馳走うになり、ことばを交わしたのだった。

仕事も順調に定年を迎えたが、体調が悪い。この先もう長くない気がするのだが、ワインにしばし身をまかせよう、人生なんてそんなもの。夫人も、いつか旅は終わるけれど今はこのワインに酔うことが一番よ、と穏やかな笑みを浮かべた。品のいいアメリカ人夫妻だった。

私も共に人生のほんの短い時間であったが、心安らぐひとときを共有することができた。あの記憶が編集長と重なるのはパロロの豊かなブーケの故か。

安藤さんの葬儀にはたくさんの花が供され、別れを告げる参列者がひきも切らなかつた。

御香と花の香りの満ちた場内で、私はパロロの芳醇な香りを思い出した。西空へ旅立ったスタッタ(須達：仏教の経典にある信仰篤い資産家)を囲んで編集委員一同ワイングラスを傾けることはもうないと思うと、あの北イタリヤの冬空のような重苦しさに私はたじろぐことができなかつた。ご冥福をお祈りします。



安藤編集長どうぞご安心ください

小林 国二

安藤さんとお会いしたのが安善寺の世話人会に最初に呼ばれた時でした。細身で眼光鋭く、そして謙虚な方で、彼は勉強家であり、決断と実行、それに俊敏性を備えた所謂切れ者でした。

ここまでで読まれている方は超エリートの感じがするでしょう。実はそうなのです。しかし、彼はそんなことをおくびにも出しません。陽気で人の面倒みが良い、冗談にも付き合う軽快な人柄でもありました。

ここまでは、全部個人的に感じていたことです。本当のことは判りません。広報委員会、編集の打ち合わせをする時にお話しし、献酌み交わしての観察でしかないからです。長いようで短い交流でしたので残念であります。まさしく、広報委員会はおんぶにだっこ状態だったので、これからどうしようかと不安になります。

ところが、彼の凄いとところは、旅立ちの前に示唆してあることです。これからの広報は、安藤さんの会社である株式会社アサヒでバックアップしますからと、後々までも手抜きが無いところですよ。それに、いつものように委員に珍しい高級酒を用意してあるのですから！

珍現象が起き、驚きました。安藤編集長ご安心下さいと、心で呟きながら安藤編集長を偲び、般若湯で夢の中……！翌日気づきました、ああまた美味しい料理と珍しい酒に乗せられたと。安藤さんの戦略にはまったと、内心思いながら、彼の微笑を感じた次第で



ここまでは、全部個人的に感じていたことです。本当のことは判りません。広報委員会、編集の打ち合わせをする時にお話しし、献酌み交わしての観察でしかないからです。長いようで短い交流でしたので残念であります。まさしく、広報委員会はおんぶにだっこ状態だったので、これからどうしようかと不安になります。

ところが、彼の凄いとところは、旅立ちの前に示唆してあることです。これからの広報は、安藤さんの会社である株式会社アサヒでバックアップしますからと、後々までも手抜きが無いところですよ。それに、いつものように委員に珍しい高級酒を用意してあるのですから！

こうなると安藤さんと一緒に広報委員会を卒業という訳にはいかなくなる。困った！彼の意志を継いで出来る限り広報を続けようと思いましたが、編集会議に臨んでいた我々の決意が伝わったのか、突然部屋の電気がパッと明るくなる

す。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

今後とも、皆様読者の参加を期待し、安藤編集長のようなユニークな記事は書けません、残された委員の責務と思ひ、努力いたしますので、応援よろしくお願ひ申し上げます。

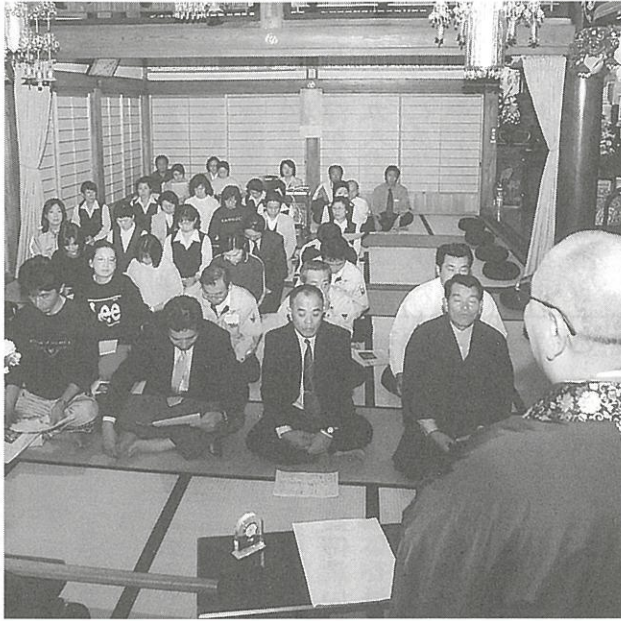
坐禅研修から得たもの

安善寺にて行われました、トリア仏壇様の社員研修のレポートをご紹介します。

仕事とは人の幸せのために仕えること

トリア仏壇上越店 浅野 義彦

先日は、お忙しいところ、お時間をいただき大変ありがとうございました。私のような者にまで、気づきと反省の機会をいただけたことに、深く感謝申し上げます。そして、方丈様の、そして仏様の大慈悲の思いに、ただただ感動の思いでいっぱいです。私は坐禅の中で、イライラしてしまう心について考えてみました。日々の仕事の中で、大小様々な問題や、自分の思いを周りの人に対して言葉にして発しなければならぬとき、あるいは決断が必要な場面などに常に立たされています。自分の考えたことを実行するにあたり、「周りの人の協力が貰えない」「思うように人が動いてくれない」、自分の考えは正しいはずなのに、なぜ判ってくれないのだろう」と、ついイライラしてしまう。研修当日の坐禅では、ここまででしか考えられませんでした。なぜ、そうなってしまったのだろうか。精進料理をいただいた後の質問コーナーで、イライラしてしまう心をなくす方法について質問させていただき、腹式呼吸法で丹田の部分まできれいな空気を送り込み、心を整えることを教えていただきました。



研修を含め三日間夜、寝る前に坐禅を組み、教えていただいた呼吸法を行い、心を鎮め、なぜそうなってしまうのか深く掘り下げて考えました。

そして、三日目に坐禅を組み始めて間もなく、自分の器の小ささや、理想とする世界の狭さにハッと気づき、今までの自分がとても恥ずかしく思えて仕方ありませんでした。

ませんでした。

不満やイライラする原因を、とかく周りの環境や、人のせいにしてしまいがちですが、実は自分自身にその原因があったのです。

丁寧な言葉を使ったつもりでも、言葉の端々にそんな間違った思いが出ていたのだと思いました。

自分が考えたことを自分でやるのは簡単だが、自分一人ではたいしたことには出来ない。一日の時間も皆に平等で限られている。いかにして、他の人の知恵や協力をいただける自分を作るか。自力と他力の融合こそが中道の教えではないかということに気づかせていただきました。中道とは「両極端でないこと」、「ちょうど良いということ」、「すなわち常識で考えるとき、「相反するもの」、「とても混ざり合わないと思われるもの」を、いとまたやすく混ざり合わせ、お互いのすばらしい面や、能力を生かしあ

い、調和させる知恵ではないかということに気づかせていただきました。

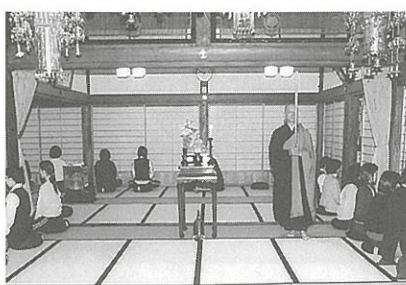
職業柄、「人は生きているのではなく、生かされている」と、よく耳にしますが、私は何のために生かされているのだろうか、時々ふとそんな思いがよぎります。

一日の大半が仕事に費やされています。ということは、一生の大半も仕事に費やされてしまうということです。現実問題として、そこから逃れることは出来ないのが実情です。

ならば、一生を楽しく明るいものとして完結するには、日々の仕事をそのようにして積み重ねていくことだと思います。仕事とは「仕える事」。会社を舞台に、お客様に仕える事であり、ご縁有りて出会った人、言葉を交わした人すべての人の幸せのために仕えることではないかと思いました。

「バシ！ バシ！」また音が聞こえる。ひよつとして、次は「私かも」と思いながら、初めて坐禅を経験しました。それも四十分間。

「バシ！ バシ！」また音が聞こえる。ひよつとして、次は「私かも」と思いながら、初めて坐禅を経験しました。それも四十分間。



愛情のこもった手料理が一番のご馳走
トリア仏壇 新潟店 佐野由美子

「バシ！ バシ！」また音が聞こえる。ひよつとして、次は「私かも」と思いながら、初めて坐禅を経験しました。それも四十分間。

きつと、きつと長い長い時間だろうと…。ところが以外にもアツという間に過ぎたような気がします。(二度は叩かれないと思いつつ、実現せずに後悔) 気持ちがあつつきりした後、の精進料理は、本当においしかったです。心のこもったお料理でした。

どんなに忙しくて、簡単なものでも、手料理が一番いい、それがなによりの愛情のある御馳走だと…。母親の手作りのご飯を食べていると、子供は非行に走らないと言います。「生きるために食べる」食事の大切さを、改めて感じさせていただきました。ありがとうございました。

貴重な時間をもつと大切にした

トリア仏壇上越店 栗原 一男

初めての体験である「坐禅」。不安と興味もあつて参加しました。会社の目的は他にあることは理解していましたが、正直なところ本音です。終わってホッとす

る気持ちと、時間が短かったことが残念でした。

厳しい社会状況の中、販売競争がますます激化し、日常生活においても、ゆとりというものが失われつつあります。そんな中、住職の話聞き、四十分間の坐禅もアツという間に過ぎてしまいました。



シーンと静まりかえったお堂の中、背後を廻るお坊さんの摺り足の音だけに神経が集中してしまい、無我の世界に入ることが出来ない。隣の人の肩に「バシッ」と音がする瞬間、ビクッと体が動く。何と気の小さいことか…。それでも、一生懸命何も考えないように努力する

ご協力をお願いします 笠井 義一



長らく安善寺総代として、本堂大改修、および落慶法要などのお寺にとりまして

大事業の重なりました折りが、どうしても家庭のこと、

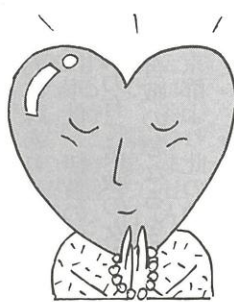
会社のこと、老後のことなど、頭の中に種々と浮かんでくる。しかし、どうしても会社のことを考えてしまう。今、自分が置かれている立場、営業成績など…。

会社がこのような機会を作ってくれたことに感謝しています。日々「忙しい、忙しい」と暮らして、時間が過ぎるが、この貴重な時間を無駄にしたくない。考えるゆとりを与えてくれた社長の配慮に感謝したい。是非、毎年一回くらいは、このような企画をして下さることを希望します。合掌

に、大変ご尽力いただきました渡邊健三総代様が体調不良のため、辞意を表明されましたのを受け、後任として一月二十日の総代・世話人会におきまして小生が委任されました。

昨今は「宗教離れ」などという言葉を耳にする機会が多くなりましたが、心の安らぎ無くして真の幸福はないと言われております。

殺伐とした世の中です。このような時代がゆえに仏教に関心を持ち、出来るだけ多くの方々からお寺の行



事に参加していただけるよう、小生浅学非才ではありますが、微力ながらお手伝いさせていただければと思っております。皆々様のご協力も併せてお願い申し上げます。

お別れ

平成十四年三月(六月二十五日)

坂爪セツ様 三月一日寂

長岡市宮原

倉重秀子様 三月六日寂

長岡市新保

佐藤マサ子様 三月十三日寂

長岡市中島

高橋 武様 三月二十九日寂

長岡市水道町

桑原 絹子 四月十二日寂

三重県多気郡

星野イシ様 四月二十九日寂

三重県桑名町

小林二郎様 五月八日寂
長岡市花園東

小林ミヨシ様 五月廿二日寂
長岡市城岡

田中 ツネ様 五月廿九日寂

安藤一夫様 六月五日寂
長岡市今朝白

鈴木 守様 六月十二日寂
長岡市横山

今井邦夫様 六月十三日寂
長岡市春日町

石田正平様 六月十八日寂
三島郡三島町

ご冥福をお祈り申し上げます。

お知らせ

お盆の棚経は安善寺

本堂で法要を勤めます

孟蘭盆会の行事は昨年同様、左記により行います。

●八月一日：一日盆参

(主に新盆の方々が中心)

●八月十三日盆参

(全檀家の方々が寺への

盆礼、盆参り、夜七時

から墓地施食法要)

●八月十四日は新盆のお宅のみ棚経に伺います。

●八月十五日

盆施食会法要

午前十時半・午後一時半

安善寺本堂

どちらでも、ご都合のよい時間にお寺にお越し

いただき、棚経に変わります。

先祖代々のお参りを

お願い申し上げます。

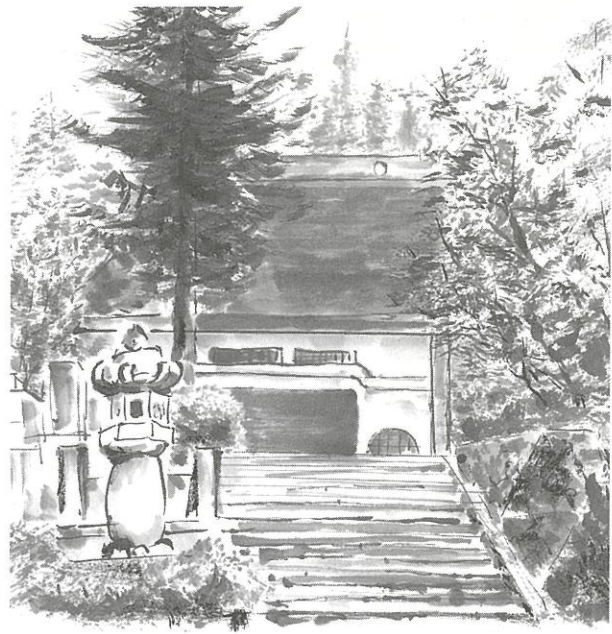
近隣寺院紹介

樹齢四百年を越えるイチヨウの木と清涼な空気に包まれた

血峰山 龍昌庵

長岡市加津保町

龍昌庵住職 田崎 寛道



長岡市加津保町の龍昌庵は、市の中心から東北部に十五キロ、遙かに弥彦山を望み、東山山脈を背景に、「眼下には「八郎瀧」と称する広大な田園が開け、また境内には木の高さおよそ三十メートル、樹齢四百年は越えるイチヨウの大木が今もひっそりと佇む清涼な空気に包まれた山寺である。当山の歴史は、血峰の城

主加藤甚九郎殿は、越後上杉謙信公に仕えた武將で、元和二年（一六一六年）三月三日没し、戒名「血峰院命宗脈大居士」。

当時、古志郡山本村大字加津保澤字前山と称する所に龍月院と称する真言宗の寺院があつたが、久しく無住で堂宇も自然に廃屋しておつた。加藤甚九郎殿の御台所、故殿君菩提のため、

この龍月院改め、曹洞宗龍昌庵と称し、山号を血峰山として一字を建立し、田畑、山林などを寄進した。

開山には同郡荷頃村（現栃尾市）曹源寺七世妍嶺邦譽大和尚、請拜して開山とす、維時寛永元年（一六二四年）七月十七日。なお、御台所、当庵開基「蔣澤院龍昌栄虎大姉」は、寛永八年（一六三一年）八月十七日没す。

また、語り継がれている話で、龍昌庵の裏山に血の峰城と呼ばれる古城跡がある。この古城は、南北町時代に新田家の家臣、篠塚伊賀守の居城と言われている。忠義深き家来、要害無双の地であつたが、敵兵に数ヶ月間取り巻かれ、兵糧の道を断ち切れられ、為に城内の兵糧も尽きて兵士力つき、興国二年（一三四一年）八月十二日、君主をはじめ一同実に三百七十余人が刺し違い、切腹をし、谷や峰が

血で紅く染まつたが命を惜しみ、敵に降る者一人も無しと言われる。

主君に妹あり、南朝の皇太后に奉仕、伊賀の局と云う。勇力有て英敏の女なり、此の合戦の急なるを聞き、急ぎ京都より此の地に来たり、とかと時すでに遅く、村人を頼み主君をはじめ一同の亡骸、遺品を集め葬り大小の塚を築く、その塚多し。世下りて、文久二年（一八六二年）七月、当山十四世大和尚この地を畑に開かんと村人に頼み、大塚を誤つて壊した。累々たる故骨に交じり、刀剣、古鏡、珠玉、器物、数十品の宝を持ち帰つた処、当日龍昌庵に不測の怪異あり、時の住職は亡霊に祟られたのか柱が汗をかくほどの光熱をだし寝込んでしまった。

驚いた弟子たちは村人が持ち去つた遺品を集め、旧の如く塚となし石塔を立て供養したとつたわる。

読者からの

便り

修行僧の熱心な姿に感動

長岡市●鈴木タマエ

安善寺様の写経会に誘っていただいてから、もう七年になります。旅行にも五回も参加し、この度は、道元禅師様の七百五十回忌の意義ある旅行に参加させていただき、大変心温まる思いであります。

風邪をひき、参加できるかどうか大変心配しましたが、自分の「行きたい」と

いう思いで、熱、咳を振り切つて行くことができ、本当にうれしい思いでいっぱいです。

本山のあの石段を登り、すがすがしい空気、本堂での待ち時間の厳肅さ、背筋を伸ばした緊張感。物音一つせず、鐘の音とともに、修行僧が次々と歩いてこられるその姿そのものが修行一筋で、あまりにも熱心な姿に心から引き締まる思いでした。

お経が始まり、順々に焼香に進み、なんとも言えない気持ちにみまわれました。今ここに私がお参りする姿



こそ、ありがたく思われま
す。

焼香の後、修行僧からその
場その場で説明がありまし
た。食事にも厳しい制限があ
り、朝早くから夜遅くまで、
寝る時間もなく修行してお
られる姿は大変なものです。

説明するも体力が乏しいよ
うに思われました。私達一
般にはできないような修行
で、若い力だからこそ乗り切
れるのだと思いました。

大変よい体験をさせてい
ただき、心につっかりと植
えつけられました。

日々の生活の中で修行と
いうことはなかなかできる
ものではありません。写経
会に入会してから、一日一
枚書かないと気持ちが悪
着きませんので、これだけ
は私の修行の一つとして守
つていこうと心を新たに
した次第です。

主人と寺々を巡った京都
の旅。その土地、土地のお
土産もたくさん買うことが
でき、有意義な旅でした。
本当に安善寺様には感謝
する次第です。心よりあり
がとうございました。

雪村友梅禪師を偲ぶ

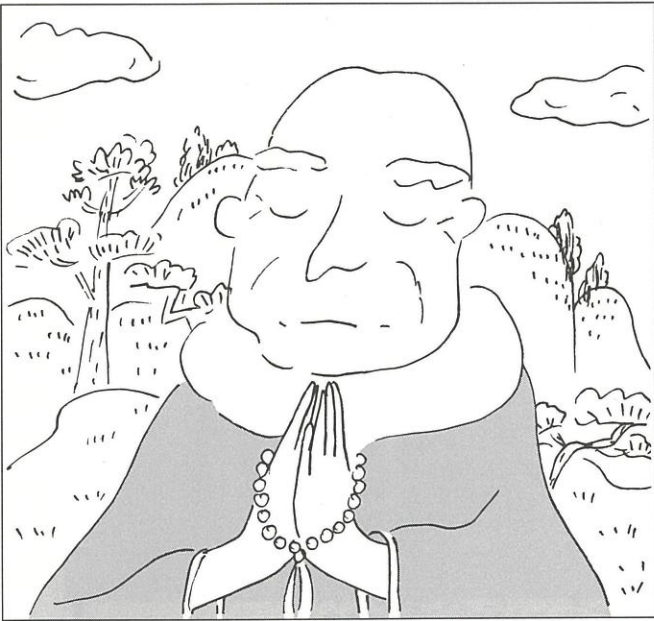
長岡市●酒井 如風

去る三月二十一日、彼岸の
中日法会の後、伊能先生
(株)エヌ・シー・ティ放送制
作部長の法話を約八十人の会
衆と一緒に拝聴いたしました。

友梅禪師については、平
成十年に長岡市出版の『ふる
さと 長岡の人びと』と題
する本の巻頭に、国際文化人
の第一号として、長岡の著名
な書家、田中玉蘭先生の懇
切な解説を読んで、印象深
く記憶に残っていました。

この度、伊能先生の情熱
あふれる講話を傾聴し、友
梅禪師の波乱に満ちた生涯
と、死を恐れぬ勇氣と偉大
な業績を偲ぶことが出来、
かかえる偉人を郷土の先人
として仰げる喜びを味わい
ました。

幼い頃から、神童と言わ
れて、知性は抜群だったと
思われます。その上、好奇
心、向学心も旺盛で、十二
歳の時、当時武家権力の中
枢であり、文化の中心たる
鎌倉に上り、仏教を学び、



十八歳で海を越えて大陸に
渡り、さらに研鑽を重ね、
深く禅の修業に努め、書道
や詩作などを通じ、朝野の
名士と交流した。

二十五歳の頃、思いもよら
ぬ奇禍に遭い、生命の危機に
瀕したが、幸い難を免れた。

禪師は四十歳となつて二
十二年ぶりに祖国に還り、
久しく会わなかつた生母と
劇的な対面を遂げる。老齡
の母を手厚く介護できて、
母子共に至福の時を持った
ことと察せられる。

禪師は、その高邁な学徳
で、招かれて信州、関西各
地八カ所を開山、または住
持した。惜しくも、故郷越
後に布教する機会を得られ
ず五十七歳で入寂された。

現代的に評すれば、天性
稀な、仏教と儒教に通ずる
宗教哲学者、卓抜した漢詩
人、それらの基礎となった
語学の達人(中国語)と呼ん
でもよいと思う。

七百年前、長岡(白鳥町)
に生まれたこの偉人を、市民
はもつとよく知り、もつと
高く顕彰すべきだと思ふ。



赤いフトンの上でニヤニヤ

長岡市●村田 トト

ペコさんへ、ぼくはトトと
申します。八才の男性(?)
です。五年前に東京からやっ
て来ました。その頃は若く、
体も細くモデルにもと思っ
ていたのですが、今は…。

早く暖かくなって、十分
に日なたぼっこをしたいと
思いますが、カラスが団体
でやって来て、こわいこと
こわいこと。

室賀さんに、「まあかわ
い」と言ってもらって、
うれしくてうれしくて、フ
フフ。時々仏壇の前の赤い
フトンの上でニヤニヤして
います。ニヤーン。

手を合わせることを忘れ
ないで欲しい

長岡市●安藤 昭子

生後七ヶ月の外孫を見る
ことになり、初めて覚えた
ことが「仏壇の前で手を合
わせて拝むこと」でした。

誰が教えたわけでもない
のに、玄関に入ったら手を
合わせ、道で人に会ったら
手を合わせ…。

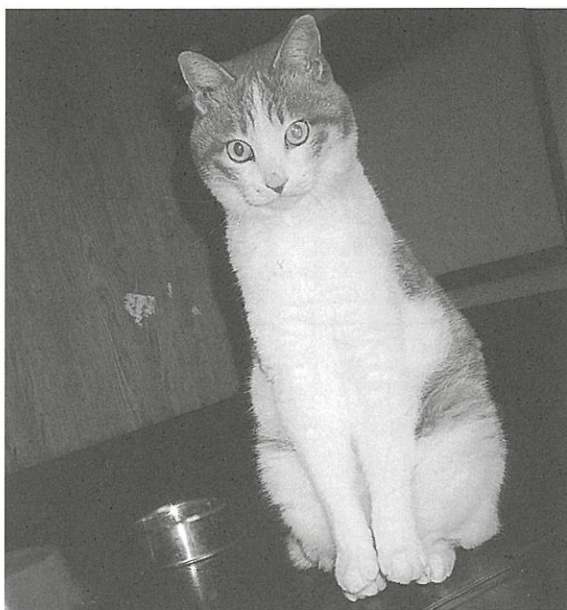
すれ違う人々は、そんな光
景に微笑みを浮かべたり、
話しかけてくれる人もいま
した。

この春から保育所に通い
ますが、いつまでも手を合
わせることは忘れなくて欲
しいと思うこの頃です。

やつぱり家族つていいな



ペコのひとりごと



今年の梅雨は比較的雨が少なく、私にとっては外に出ることが出来るので大助かりでした。それに、外から帰ると、私の水飲み用のコップに誰とはなしにきれいな水を入れてくれるので、幸せこの上ない気持ちで、頭を床に擦りつけて嬉しい表情を体いっぱい表現するので

す。「ペコ、可愛いね！」なんて言われると大満足です。でも、同じ生きものでも、庭の木々、特に今が一番きれいな紫陽花は見ていても可愛そうなほどです。雨が降らない日が続くと、せっかくなきれいに咲いた花がぐったりとしてしまふのが私にも解るので

す。「日本戦の時間に、私がお腹がすいて泣いていても、誰もかまってくれず、「ペコが泣いているよ」と言う言葉が返ってくるだけ」。終わって本当にホッとしました。夜中の雷雨も気づかずにぐっすり眠っていたのは、他でもない住職なのです。最近、本当に忙しそう

これだけ広い境内、コップ一杯の水とはいかないのです。でも、昨夜のものと違い雷雨は、さすがの私も目が覚めました。一人だけ気づかず熟睡していた人がいたようでしたが……。それはともかく、庭の木々が生き返り本当に輝いて見え、私もホッとしました。ホッとしたと言えば、ワールドカップの日本戦が終わったのも私にとっては嬉しい限りです。(叱られそうです)

で、私も住職の姿を一週間くらい見かけないことすらあります。当の本人「一番忙しい年代なんですよ！」なんて声がたまに聞こえてきますが、檀務や会議が重なる日など、一日に何度も替えている姿など見ていると「本当に「苦労様」と思わず声が出てしまいそうです。そんな中でも「今日はペコを見てないけど」なんて、声が聞こえると「私も大事な家族の一員なんだな！」と、心から幸せを感じる瞬間なのです。ニヤーン！

編集 雑感 この「季刊・蔵王山安善寺」第十号は編集委員にとって特別のものになってしまいました。この季刊誌を発売することになった言い出しっぺの安藤一夫編集長が他界され、残された編集委員だけでこの季刊誌をつくらなければいけなくなつたからです。実は、安藤編集長は、私の会社の社長でありました。なにをするのか訳も分からぬまま、社長命令でこの季刊誌の編集に携わることになって四年、他の社員からは「なに作ってるんだ？」と不思議がられながら、社長との共同作業で編集してきました。初めの頃は、安善寺様の檀家でもないのに、自分が

こんなことをしていいのだろうか、他に会社の仕事だっていっぱいあるのに、不満にも似た疑問がありました。そこは「社長命令」ですから、やるしかありませんでした。

しかし、何回か回を重ね、編集委員の方との楽しい編集会議をしていくうちに、お寺のこと、仏教のこと、さらには人間としての生き方といったものまで勉強させていたでいることに気づきました。これも安藤社長のおかげと感謝しています。安藤社長は、どちらかというとワンマンタイプに近く、いつも自分が指示しなければすまないような人で、季刊誌も、今まではすべて指示のもとに作っていたのですが、その編集長が居なくなつてしまふ、とまどいもあります。小林国二新編集長のもと、今までは以上に皆様に愛される「季刊・蔵王山安善寺」を発売し続けていきたいと思ひます。今後とも皆様のご協力をよろしく願ひします。

「近藤 善信」

お便り原稿用紙

季刊誌では、壇信徒・読者の皆さまと、ごいっしょに誌面をつくりながら、コミュニケーションを深めたいと思います。同封のハガキは、ファックスでも、郵便でも送れます。気軽に、お便りをお寄せください。お待ちしております。

原稿の例

- 思い出話／ご家族、ご先祖、お寺の思い出話など。
- 私に言わせて／家事や子育てのお話、身近な出来事など。
- 教えてください／仏事のしきたりや疑問(編集部や住職がお答えします)など。
- 嬉しい・楽しい/嬉しかったこと、楽しかったこと、怒ったこと。

第十九号、秋号は平成十四年九月十三日(金)発刊予定です。